

『新青森市史 資料編3 近世(1)』

印牧 信明

本州の北端、陸奥湾に臨む県都青森市では、市制施行百周年を記念して、平成十年以来『新青森市史』(全二一巻)を編さんしてきたが、同十四年十二月、その一冊として資料編3近世(1)を発売された。

編集責任者は同市史の近世部会長で弘前大学教授の長谷川成一氏で、青森県内外の第一線で活躍されておられる研究者の方々が編さん・執筆に参加しておられる。

以下、書評というよりは、資料編の紹介というかたちで私見を綴らせていただくことにする。

さて、本書は寛永三年(一六二六)の青森開港から明治四年(一八七二)の廢藩置県ころまでの時期を対象とし、主として青森湊の関わる史料を系統的に配列し掲載している。

編者は、津軽(弘前)藩領であった青森湊の歴史の変遷を視座に置き、港湾都市の成立と変容、全国海運と地域海運の結びつき、松前・蝦夷地との関係などに関わる史料を幅広く取り扱い、つぎの六章からなる章立てを行っている。

第一章 青森湊の成立と九浦制度

解説

第一節 青森湊の成立

第二節	寛文蝦夷蜂起
第三節	九浦制度
第二章	全国海運と地域海運
解説	
第一節	全国海運
第二節	地域海運
第三節	諸役
第四節	湊と商人
第五節	依物の移出
第六節	合船と破船
第三章	九浦制度の解体と油川湊
解説	
第一節	九浦制度の解体
第二節	油川湊
第三節	油川湊役人
第四章	松前・蝦夷地と青森湊
解説	
第一節	天明期までの松前と青森湊
第二節	寛政期以降の蝦夷地・江差と青森湊
第五章	開港期の箱館と青森
解説	
第一節	箱館開港と青森
第二節	箱館と青森御用達

第六章 近代港湾都市への変容

解説

第一節 箱館戦争と青森湊

第二節 青森商社

第三節 長尾周庸の見た維新期の青森

各章は二節から六節をもって構成され、それぞれのテーマに沿った史料を編年順に配列している。また、各章の冒頭には解説が付けられている。

まず、各章の構成内容をごく簡単に要約すると次のとおりである。

第一章は津軽（弘前）藩領青森湊が成立し、同藩の流通・運輸統制機構である九浦制度に組み込まれた約一〇〇年間を対象としており、港町の成立から整備・発展の過程を歴史的な流れに沿って理解できるように、史料を配列している。特にこの時期、青森湊が東廻り・西廻り海運の有力港として位置付けられたことや、蝦夷地との交易体制が確立、発展したことに考慮した構成となっている。

第二章は、東廻り・西廻り海運で知られる全国海運と津軽海峡を舞台とした地域海運との接点を占める青森湊の位置と、全国・地域海運が相互に関わりあいを示す史料を、幅広く盛り込むかたちで構成している。

第三章は、津軽藩の九浦制度成立後から解体期にわたる約二〇〇年間を対象にしている。幕藩制的商品流通が変容する中で、九浦制度もその機能を低下させていくが、その過程を制度の中心に位置した青森湊とその対抗関係にあった油川湊の動向から捉えようとする構成となっている。第四章は、海峡を挟んで密接に結びついていた松前・蝦夷地と青森湊

の関係を、天明期までと寛政期以降の二つの時期により節を区分し、松前・蝦夷地への米の移出、松前・蝦夷地海域からの海産物移入に関し、青森湊が果たした役割を示す構成となっている。

第五章は、安政元年の箱館開港から明治元年の箱館奉行所廃止に至る一四年間を対象に、箱館開港と青森湊の関わりと、青森御用達を勤めた滝屋・藤林両家が箱館との通商・交易を示す史料などで構成している。

第六章は、明治元年の箱館裁判所設置から同四年の青森商社廃止までの四年間を対象に、箱館戦争時、新政府軍の兵站基地となった青森湊を、松前・蝦夷地奪還に向けての新政府軍最前線基地としての機能や、津軽藩による青森商社の設立、維新期の青森のすがたを推知し得る「津軽長尾日記抄」などの史料で構成している。

つぎに、本巻を通じて筆者が興味を覚えた、商品流通や廻船活動などを示す史料について少し紹介してみたい。なお、筆者の関心から第一章から第四章を対象とし、特に第二章の史料紹介が中心になったことをご了承ください。

第一章では、第一節に掲載された、青森湊を対象とする明暦・寛文期の「判紙請求状」があげられる。ここでの判紙とは港の沖口における移出入許可証を示しており、近年刊行された青森県史の資料編にも掲載されている。

これらの史料からは単に船や物資の移出入が判明するだけでなく、青森湊から松前へ移出された米などの問題、特にこの時期同湊から南部領への商船の渡航が禁止されたことにより、松前との交易に重点が置かれていったことを示唆する内容を含んでおり、近世前期の津軽藩の流通統

制を考察する上で注目される。

第二章は全国海運と地域海運が取り上げられているが、第一節では江戸廻船などの拠点であった青森湊から船が出船する場合、直接下北半島を廻るのではなく、津軽半島の蟹田や今別・三厩などの諸港で一端物資などを積み込んでいたことなど、その実態が明らかになる史料が掲載されている。また青森湊が地域海運の拠点でもあったことから、松前や南部との間で隠津出（抜け荷）が横行していた事実も史料として示されている。

第二節には、こうした地域間の交易が地元の船だけでなく遠方の地域、例えば十八世紀初頭の唐津船や肥前船の進出に見られるように、他国船によっても行われていたことを示す史料も掲載されている。これらは、十七世紀後半から活発となる広域的な日本海沿岸での商船活動の展開と結びつけて考えるべきであろう。

なお、幕末ではあるが、嘉永五年から六年にかけて青森湊へ荷揚げされた諸品の調査記録も掲載されており、木綿や衣料品、鉄類、材木、塩乾物などの取引が大きかったことがわかる。同湊での物資の移出入動向を理解する上で、この時期の領内や北国諸港の状況と比較して検討することも望ましいと考える。

第五節には、長崎貿易の重要輸出品であった俵物の移出に関わる史料が掲載されている。周知のとおり俵物とは、清国向けの輸出品であった煎海鼠・干鮑・鱧鱈などの事で、上記の特産品は津軽・南部藩領でも仕入れられ、遠く長崎へと廻漕されている。在地の史料と共に長崎市立博物館所蔵文書も掲載されていて大変便利がよい。

俵物の調達には当然幕府が力を注いだが、主要な仕入地としては松前だけでなく津軽や南部などの地域についても着目する必要がある。幕府役人による調査記録によれば、青森湊に藩領の惣支配問屋が置かれると共に、各地域の支配問屋や諸浦の下請人なども記されており、仕入体制の一端を知ることができる。

とにかく、青森の地から見て遠く離れた九州西端の長崎と如上の交易品を介して結ばれていたことは、全国海運の発達を抜きにしては考えられないのである。

ところで、青森湊はまた津軽半島などの著名なひば材などの移入港としても知られているが、第六節には合船すなわち造船関係の史料が掲載されていることにも興味をひく。地域に存在する良質の材木資源と鉄の生産により、津軽領内の港では近世前期より造船が行われていたが、そうした資材の調達と船大工・木挽などへの食料供給などの問題にも目が注がれている。

領内では小廻り船などの小型船から北国船・羽ヶ瀬船や弁才船などの一部に見られた大型船も建造されていた。史料からは地元の船大工ばかりでなく、大坂の船大工なども進出し、津軽・南部・松前などを転々としながら活動していたことが窺える。

また、同節には難船・破船などの海難史料も盛り込まれているが、難船の処理については、地元の慣習などに基づいて行われていたことがわかる。

第四章では、青森湊が、特に松前・蝦夷地からの海産物移入港として、また松前・蝦夷地への米穀の移出港としての特徴を示す史料が、数多く

掲載されている。特に近世中・後期の西廻り航路沿岸諸港の交易や北前船などの研究者に重視されてきた、江差町の関川家文書の積極的な活用も図られている。第二節に掲載された宝暦期の入船帳など同家史料からは、地域海運に従事する青森その他の小廻り船が、津軽海峡を舞台に重要な役割を担っていたことが窺える。

なお、同章には青森湊の豪商滝屋（伊東家）の文書（青森県立図書館所蔵）中にある天保十二年の「長久録」が掲載されている。豪商滝屋の扱いや各章のボリュームなどに配慮してのことと考えられるが、内容的にみて全国海運をとりあげた第二章に収載した方が、利用しやすいのではなからうか。

さて、改めて記すまでもないが資料編を編さんする過程においては、その巻の目的に応じた史料の選択と共に、ボリュームにも配慮しながらどのような章節構成を考案するか、そして利用者への利便性をどこまで追求するかが問題となる。また一方で資料編としての精度を高めるため、史料の判読と校合、割付けや校正作業をどこまで厳密にするのかという問題もある。そして、これらの課題にどれだけ取り組むことができたかということ、資料編としての価値がかなり変わってくると思われる。

自治体史の場合は通常刊行年度が予め計画されているので、限られ時間の中で如上の課題に、どのように取り組んでいけるにかかってくる。本資料編の場合は、近世青森湊の歴史的な推移を示す、基本的史料を押えた上で、同湊の内外に存在した歴史上のさまざまな事象に視野を広げ、充実した内容の資料編を完成された点で、非常に高い価値があると見えるであろう。

特に商品流通とその統制や、全国海運と地域海運との結びつきという観点で見た場合、津軽藩政と青森湊の関係や地域海運の拠点を示す史料が数多く盛り込まれている反面、全国海運との結びつきを示す史料が少なく、史料の構成を勘案しながらもう少し充実を図っていただくとありがたかった。

なお、一般に資料編は難解に思われ、敬遠されがちであるが、本編の場合は歴史の流れをスムーズに理解できるように、通史編風の編さん方法を導入している。史料を各章に分け、原則的に編年順に配列していること、各章の冒頭には解説をつけ、さらに総説と各説に分け、読みやすく理解しやすいようにしてあること、解説中で馴染みの薄い歴史用語は丁寧に説明し、読みづらい地名・人名に読み仮名をつけてあること、などがあげられる。

さらに、近世前・後期の絵図を付図としてつけ、本編と併用することで青森湊への理解が深まるようにしてあることなど、こまかい配慮もなされている。

もつとも掲載史料ごとの細目次を冒頭に付けていただきたかったことや、史料本文にも解説と同じような配慮で、傍注などを多く付していただと、さらに利用者に役立つと思われる残念であった。ひとり研究者だけでなく一般読者の側に立って広く利用されるよう、行き届いた編集がなされることが望まれる。

なお、巻頭のグラビアについては、単に本巻で翻刻した史料の写真を掲載しただけではなく、さまざまな試みもなされている。

例えば、「全国海運と青森港」の「滝屋伊東家の全国商圏の広がり」

は、近世後期の滝屋文書に見られる押印に着目し作図したものと思われる。着想が面白く視覚的效果もあり、見ていて楽しいものである。

但し、取引先が限定され、近世後期の青森湊を代表する商人のひとりであった滝屋の商圏図としては、不十分な点があると考えられ、前述の「長久録」や未収録の同家史料などを活用して、幕末の滝屋の取引先を網羅したより詳しい商圏図が、通史編などで作成されることを期待したい。

また、グラビアの鉛筆筒（青森市歴史民俗展示館「稽古館」所蔵）は、越前三国湊の商人の活動を示すものであり、嘉永二年の箱書がある貴重な資料である。墨書のある隠箱を様々な角度から撮影した写真も掲載されていて参考になる。港の歴史に関わる市史を編さんする場合は、古文書や記録だけでなく、鉛筆筒や絵馬、石造物など民俗資料などについても重視することが必要と考える。

青森市は戦後間もなく『青森市史』（全一四巻）の刊行を開始し斯界に寄与したが、なにぶん最初の刊行から半世紀が経過し、その間に歴史研究の進展は誠に目覚ましいものがあり、最新の研究成果を取り入れた『新青森市史』の編さんが全国的にも待望されていた。

このたび新市史の一冊として、近世の青森湊に関わる多数の新史料を収載した資料集が公刊されたことは、まことに喜ばしいことである。多年にわたり史料の調査・収集・整理に多大の努力を払い、編集に様々な工夫を凝らし、本書を完成された関係各位に惜しまぬ賛辞を呈したい。

（A5判、七一頁、青森市、二〇〇二年十二月刊、七三五〇円）

（かねまき・のぶあき 福井市立郷土歴史博物館学芸員）